

広島地方裁判所御中

原告意見陳述要旨

伊方原発運転差止等請求事件本案訴訟

2022年3月14日第27回口頭弁論期日

第1陣原告 山口 裕子
(広島原爆被爆者)

山口^{やすこ}裕子と申します。89歳です。長年抱き続けている熱い思いを語れる機会を与えて下さったことに感謝いたします。

(原爆体験)

広島市中心部の本通りに明治22年祖父が創業した時計店で生を受け、その後本通り近くの商店街堀川町に移転し、そこで1945年8月6日に至りました。

あの日は市内の旧制中学1・2年にあたる全生徒約8千人が、市街地に防火帯をつくるための建物疎開作業に動員されていて、大半の約6千人の子どもたちの未来が無残に奪われてしまったのです。

高等女学校1年12歳だった私は、父母をはじめ家族6人で暮らしていて、あの朝作業のため登校したのが別れとなりました。あの惨禍のなか、ただ1人瓦礫の下から炎の中を生きのびた姉も激しい苦痛の中で逝きました。

その後の語り尽くせぬ生活のことはさておき、本題に入ります。

(原発に反対するきっかけ)

最初に核のゴミ問題との出会いでした。被爆後30年から広島のカトリック信徒として平和のために働こうと「平和を願う会」で学習と活動を続けていました。

その頃、日本の原発で処置に困っていた低レベル放射性廃棄物をドラム缶に詰めて太平洋のマリアナ海溝に投棄する計画を、現地に

いて共に反対運動をしている邦人シスターによって知りました。早速呼びかけ文とチラシをつくり、街頭署名をはじめました。運動は教会関係を中心に全国的に拡大して、集約した署名を科学技術庁に提出、現地の強い抗議と相俟って核廃棄物海洋投棄計画は断念されました。

それを契機に私は原子力発電とはどういうものかを学習するようになりました。知るほどに原子力＝核による発電の恐ろしさを思い、被爆者としての証言を求められた時には、原子力平和利用とはと語りました。しかし私の取材記事ではいつもその部分は削除でした。

（芦浜原発のこと）

20 数年前に三重県に住む友人の案内で、反対運動真っ最中だった芦浜原発建設予定地の漁村に行き、漁師さん達から長年にわたる苦闘と分断された地域の悲痛な状況を伺い、翌日は船で現地を案内されて太平洋に面した息をのむほどに美しい景色に打たれました。その後は微力ながら応援を続け、知事の英断で白紙撤回となった時の喜び、それは南海地震が警告されている今、設置計画反対を貫いて下さった方達への感謝の念となっています。

（東海村 JCO 事故のこと）

東海村 JCO の臨界事故は衝撃でした。ある会場で、その時被曝した作業員大内さんのお元気な時から被曝後日を追って変わっていく顔写真を見たとき、私の中では原爆の時、1 人生きのびた姉が、もたえ苦しみながら日ごと変わっていったときの忘れることのできない容顔と重なりました。核による被害は全く同じなのだと示されたのです。

地震の都度その近くの原発を気遣うのは私だけではないと思います。あの 3. 1 1 ではどれほど動転した日々だったことでしょう。これで日本中の原発は止まる、と思ったのに、被害を受けた多くの方達のご苦難をよそに、事故は風化させられようとしている悲しい昨今です。

（未来への責任）

原爆による身体的精神的痛みの消えることはありません。

教皇ヨハネ・パウロⅡは、広島を訪問された際、「過去をふり返ることは未来への責任を担うことです。」と語られました。私はこのことばを胸に、生かされた者の責務を今後どのようにとする日々を送りました。

そのような中で出会ったのが、伊方原発を止めたいとの声を被爆地広島からという裁判、これだと思って原告団に加わりました。また、今回新たな伊方原発運転差止仮処分の訴え（広島新規仮処分）を起こす際、7人の申立人の1人にもなりました。

瀬戸内海は景勝だけでなく世界の学者も注目する貴重な生物の宝庫であり、その入口に位置する伊方原発はまさに「残念な存在」と思われます。同じ瀬戸内海で40年もの長きにわたって上関原発建設反対運動を続ける方達に対し、尊敬と感謝の念で応援しています。

原発は運転するだけでも未来世代に多くのリスクを残しますが、まして南海トラフが動き、中央構造線断層帯が連動したら、いったいどうなるかと思えます。

「原子力規制委員会の規制基準適合性審査合格は、当該原発の安全を保証するものではない。規制委は基準に適合しているかどうかを審査しているのであって、安全を審査しているのではない。」との規制委員会の言葉を肝に銘じ、貴裁判所におかれては、私たちの未来への命運を握っているともいえる伊方原発について賢明なるご判断の上、是非とも運転を差し止めていただきたく、切望いたします。

ご清聴ありがとうございました。